二人っ子をめぐる中国都市女性の揺らぎ
――ぶつかるワークとライフ――

キーワード：二人っ子政策，ジェンダー，職場復帰，育児支援，教育プレッシャー

人間共生システム専攻
黄　師佩

問題と目的

中国では 30 年以上にわたって「一人っ子政策」という人口抑制政策が実施され、出生率が持続的に低下し、人口構造が変動し続けた。その結果、急激な少子高齢化に直面し、人口抑制政策の緩和が求められるようになった。社会の持続的発展のためには、人口を抑制する政策から人口構造を調整する政策へ転換することが必要となり、2016 年より「二人っ子政策」が実施されることとなった。

しかし、「二人っ子政策」への人口政策の転換によって少子高齢化に歯止めをかけることが期待されているが、出生人口は 2017 年から 3 年連続減少し、「二人っ子政策」への人口政策の転換によって少子高齢化に歯止めをかけることが期待されているが、出生率の押し上げにつながっていないことが明らかになった。なぜ、「二人っ子政策」の主体である女性は二人目を産むことができるのに産まないのか、こうした理想と現実のギャップはなぜ生じているのかを明らかにすることが本研究の目的である。

方法

本研究では、2019 年 12 月から 2020 年 10 月にかけて、中国の広州市で二人っ子を持つ既婚女性を対象に半構造化インタビュー調査を行った。各調査対象者に 1 時間から 2 時間程度でインタビューした。調査対象者は 1970 年代生まれ 3 名、1980 年代生まれ 3 名計 6 名の既婚女性である。彼女らの仕事や生活の現状と育児に関する意識について聞き取った。

結果

A 氏

大学を卒業した後、広州市のスーパーで商品のバーコードに関する仕事を 1 年間ぐらいしていた。その後、転職してスーパーのコンピュータシステムを開発する外資企業で働いていた。

一人目の育児について、22 ヶ月まで長男はずっと農村に住む姑のところに預けていた。その時、1 ヶ月か 2 ヶ月に一回に姑のところに戻り、数日間ぐらい長男に会っていた。幼稚園を通うため、長男は広州に戻ってきた。最初は長男が慣れていなかったので、姑も広州に来て長男の世話をしてくれた。経済的余裕がないため家政婦は雇っていない。長男が小学生になると、自分は仕事をしながら、子供の世話をしていた。

次男を出産した後、母親が 1 ヶ月世話してくれた。姑が主に食生活の世話してくれた。出産後 3 ヶ月で一度仕事復帰したが、人事異動や仕事の無力感により、夫と相談して仕事をやめて専業主婦になった。現在は家でウィチャットを使って保健品の販売をしながら子供の世話に専念している。

夫は食器洗いぐらいの家事をしている。仕事が早く終わって家に帰ると、A さんが料理を作るとき、子供と遊んでくれる。

長男は絵画クラスに通っている。人生をより豊かにし、子供の才能を発掘し、伸ばしてほしいと A さんは語った。

子供の将来への期待については、中産階級、特に弁護士になってほしいという。

B 氏

広州の大学を卒業後、ある民間企業で会計係をしていた。

長女の出産の時、母と姑が世話してくれた。長女は 5 歳まで実家にいた。平日は長女を姑のところに預けていた。週末は自分の母に預かってもらった。小学校に通う年齢になると、長女は広州の自分のところに帰ってきた。長女を学校に送ってから会社に行き、仕事が終わってから学校に出迎えに行く毎日を送っていた。

次女を妊娠して 6 ヶ月の時、産休を取った。女の子だったので姑は世話してくれず､母のみ世話してくれた。産褥期が終わってから次女と一緒に広州に帰った。次女が 6 ヶ月になるまで、義姉が育児を手伝ってくれた。また、半年間ベビーシッターを雇ったが、信頼できず費用が高かったため、仕事をやめて専業主婦になって子育てに専念した。

夫の育児参加はほとんどなく､週末に子供と遊んだり、祝日に旅行に行くぐらいである。

長女はピアノクラスに通っている｡次女はサクソフォーンクラスに通っている。また、子供に負担をかけたくないので塾に行かせず、数学オリンピックの際も自分が習って教えていた。

長女には清華大学に行ってほしいと考えており、次女には一番公立小学校に行かせたいと考えているため、精一杯育児に励んでいる。

C 氏

専門学校を卒業して民間企業で事務職をしていた C 氏は企業が倒産したため、ホテルのフロント業務に転職した。その後長男を出産するにあたり、退職した。家計を維持するため C さんが職を転々として今は不動産会社で住宅販売や賃貸をしながら、ヴィーチャットで衣料品を販売している。

長男を出産する時、姑や二人の義姉が世話をしてくれた。退院後、クリーニング店を経営しながら子育てしていた。育児環境がよくなかったため、夫と相談してベビーシッターを雇いたかったが、経済的余裕がなくあきらめた。実家の姑に頼むと、住み込みで長男の世話をしてくれた。昼間は姑が子供の世話をしてくれたが、夜は自分ひとりのみであったため、睡眠不足など身体的・精神的に大きく負担となった。長男が小学校に通い始めると、朝、長男を学校に送ってからクリーニング店にいき、迎えはほとんど姑であった。週末のピアノクラスにも付き添っているため、自分の時間がほとんどない。

夫は家にいる時、ほぼソファーでテレビをみるばかりで、育児参加はゼロといっても過言ではないという。

将来、長男には少なくとも 985 か 211 大学に行ってほしく、次女にも学校の先生など安定した仕事に就いてほしいという。

D 氏

大学を卒業して、保険会社で働いていた。その後、資産運用に関する金融機関に転職した。同じ会社で働いていた夫と結婚した。長男を妊娠した時、妊娠症状がひどく 2 週間仕事を休んだ。休暇が終わった後、仕事を継続するかやめるか悩んでいた。チームワークに追いつくことができず、同僚から不満があるので、会社をやめて専業主婦になった。今は株の投資をしている。

長男の育児について、実親は仕事があり、姑は義兄の長女の世話をしていたので、自分一人で育てた。3 歳までは結構大変であったという。同じマンションに住んでいた他の母親たちと助け合って何とか乗り越えた。

長男の世話をする経験があるので、次男の育児過程がより順調だが、周りのママたちに比べて、自分には教育学や心理学の専門知識に欠ける気がした。将来、次男をいい学校に通わせるため、引越しするつもりである。

夫は休みの時間が決まっておらず、育児はともかく、夫婦の間のコミュニケーションすら少ない。

長男は、趣味として、また将来の入学試験での競争力を向上させるために、テコンドーやドラムクラスに通っている。長男や次男も将来に清華大学に通って、エリートになってほしいという。

E 氏

中等専門学校から卒業した後、広州市の燕塘乳業で 3 年間働いていた。夜勤が嫌いだったので燕塘乳業の仕事をやめたあと、スーパーでレジ係をしていた。長女を妊娠している時、吐き気がひどく、風邪や熱の時、休みを取ることが難しく、家族にも退職するよう要求されたので仕事をやめた。また、姑から「女性は結婚したら家にいるべきだ」と言われた。しかし、夫だけの給料では家族の生活に足りなかったため、スーパーの仕事をやめた後、焼き鳥店を切り盛りしていたが、子育てのため閉めた。今はアパレルのショップを営業している。

長女を出産したときは、自分の父と母が世話をしてくれた。夫は一週間の休暇しか取れなかったが、その間ずっと付き添ってくれた。退院した後、ずっと一人で育児をしていた。その間、家政婦を 1 人雇ったことがあるが、やはり、家事をほかの人に任せるのは信用できなかったためあきらめた。子育て中、悩みがある場合は、自分が参加した母親グループでコミュニケーションしあいながら、現場の活動にも活発に参加していた。

次女も自分で子育てしている。用事がある場合、両親に任せるしかない。祖父母は子供を甘やかしていると考えている。子供の教育にも世代間にもギャップが存在している。時間をあっという間に過ぎてしまうので子供時代を大切にしている。

自分の学歴が高くないので、できるのは最大の努力を尽くして自分の子供の知識を豊かにするしかないと考えている。長女は華南師範大学に属する私立幼稚園に通わせた。小学校にも華南師範大学所属の小学校に通わせる予定。なるべく子供の学習要求を満足させたい気持ちである。将来は、長女と次女を重点大学に通わせ、いい人生を過ごさせたい。

F 氏

自分は 2 回大学入試試験に参加した経験がある。重点大学を目指して、1 回目は落ちたが、2 回目で合格した。大学を卒業し、専門は法律だったが、弁護士の資格証を獲得してなかったため、弁護士になれなかった。大学卒業後、英語が得意なので深圳に外資系企業の人事部で働いていたが、やりがいがないためやめた。広州に戻って、カトラリー製造会社でマーケティング課で働いていた。今は華南地域のマネージャーになった。

長女を出産した後、主に自分の両親が世話してくれた。夫はまだ軍隊にいたので出産の時もそばにいなかった。退院後、姑が長女の世話を手伝ってくれたが、いつも細かいところで意見の食い違いで喧嘩した。幼稚園に通ってから自分の親のところに預かっていた。平日は自分の親が出迎えてくれた。夫もそばにいなかったため、実家暮らしであった。経済的にも、自分の親が助けてくれた。

子育てがきついため二人目を生みたくないが、「まだ若いから、手伝ってあげる」と親にせかされた。

次女は自分の親が世話してくれた。ベビーシッターも雇ったが、月 8000 元かかった。

子供の将来への期待は一番いい大学を目指してエリートになってほしい。

考察

少子高齢化を食い止めるために、中国では「二人っ子政策」が実施されたが、出生率が減少している。なぜ、「二人っ子政策」の主体である二人目を産むことができるのに産まないのだろうか。女性たちは出産に消極的になっている理由としては以下の 4 点である。

第一に、出産のプレッシャーがある。二人目を持つ調査対象者は、自分は二人目を産みたくないが、姑に出産を催促されていた。特に、一人目が女児である場合、二人目の出産をせがまれるというプレッシャーがある。また、70 年代生まれの 3 名とも、二人目を出産した時は 40 歳ぐらいで高齢出産のリスクがあった。

第二に、職場復帰のハードルが高まるという問題があった。二人目を出産した女性は職場復帰にあたり、様々

なハードルを経験した。希望する仕事をしようとしてもできないという、再就職先を選ぶことの難しさが伺える。一度キャリアを捨てると、またゼロからスタートしなければならない。職歴が空いていると再就職が難しくなる姿が見られる。職場に復帰しても、思い通りに働けない。育児のため、退職をほのめかされるなど不公平を訴えている女性たちの存在がありありと見えた。さらに、産休あけに仕事に専念し、子供を母に預けてキャリアを捨てなかった女性は、子供に愛をあたえなかったという母親役割とキャリアとの挟間における揺らぎが強い。

第三に、ワンオペ育児が広がっている。

まず、祖父母の積極的な育児参加は子育てにとって欠かせない手助けとなっているが、世代間の育児に対する考え方のギャップがあるためサポートを得づらい。そして、「一人っ子」政策の影響で、兄弟姉妹数が減少するため、親族間のサポートはこれまでに比べて困難をきたしていくことも予想された。

次に、仕事が忙しいことを言い訳として父親不在の育児問題が顕著化している。育児の負担が女性の方に偏っている。家事能力が高く、母親と対等に近いケア役割を果たしている父親の姿は見られず、父親の役割は「育児援助」というレベルにも達していないとも言えよう。むしろ、多忙な父親は子供の遊び相手と位置づけられているほうが相応しい。

そしてベビーシッターなど市場のサービスの活用も困難である。祖父母、夫や親戚などの育児支援が脆弱で、育児期の女性はベビーシッターなど育児支援サービスに助けを求めるしかない。しかし、ベビーシッターを管理する専門機関は現時点ではまだ存在していないため、ベビーシッターの労働市場では、まだ資格を持っていないなど質が低く、責任感が欠如し、流動性が高いベビーシッターが多いなど、利用への不安が伺える。さらに、ベビーシッターを雇う費用は低くないので、収入が不安定や低い家庭にとっては、経済的負担になった。

第四に、子供に対する教育のプレッシャーが大きい。中国社会で高まっている高学歴志向を背景に、現在の子供に求められているのは全面的に発達する立派な人材である。子供の将来への期待について、とりあえず重点大学に通わせたいという中国の教育ママぶりが伺える。重点大学に入学するためには、重点高校に入らなければならない。重点高校以外から重点大学に入学するのはきわめて難しいからである。このように重点小学校、重点中学校、そして重点高校から重点大学へ進学するというピラミッド構造が成り立っている。親は子供をスタートラインから後れないようにと、自分が受けた教育レベル以上の教育を子供に受けさせてあげたいという思いが強い。激しくなる受験競争と教育熱の高まりは家庭の教育費用負担を増加させた。受験競争は家庭の経済力の競争と言っても過言ではない。

二人目を持つ女性は出産のプレッシャーをもち、高まる職場復帰のハードルにあたり、広がるワンオペ育児に直面している問題が浮かび上がっている。さらに、特に、子供の教育プレッシャーが重いことが伺える。このようなワーク･ファミリー･コンフリクトを持ってからこそ、出産に消極的になっている。本研究で見いだされたような女性のワーク・ファミリー・コンフリクトを解決するには、個人、家庭、組織と国家などの力をあわせ、女性の成長と発展に必要な福祉的支持を提供しなければならないが、現実的には、女性が多く負担している。

主要引用文献

鎌田とし子・木本喜美子・矢沢澄子,1999,『講座社会学 14 ジェンダー』東京大学出版社.

馬欣欣,2011,『中国女性の就業行動―「市場化」と都市労働市場の変容(慶應義塾大学産業研究所叢書)』慶應義塾大学出版会.

落合恵美子,1989,『近代家族とフェミニズム』勁草書房.

落合恵美子・山根真理・宮坂靖子,2007,『アジアの家族とジェンダー』勁草書房.

大沢真知子,2006,『ワーク・ライフ・バランス社会へ――個人が主役の働き方』岩波書店.

瀬地山角,2002,『東アジアの家父長制―ジェンダーの比較社会学』勁草書房.